



華やぎ添える小花のフリル

# 宿根かすみそう

わかやまの



育むのは人と風土



宿根かすみそうの栽培スケジュール

| 7月   | 8月 | 9月 | 10月 | 11月    | 12月 | 1月         | 2月 | 3月 | 4月 | 5月     | 6月 |
|------|----|----|-----|--------|-----|------------|----|----|----|--------|----|
| 定植準備 |    | 定植 |     | 1 番花採花 |     |            |    |    |    |        |    |
|      |    |    |     |        |     | 刈込、二重被覆、整枝 |    |    |    | 2 番花採花 |    |

(JA 紀州花き部会資料より)

和歌山産品に関することなら…

〈和歌山県アンテナショップ〉  
 わかやま紀州館 <http://www.kishukan.com/>  
 東京都千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館地下1階  
 TEL. 03 (6269) 9434 FAX. 03 (6269) 9433  
 営業時間 10:00~19:00 (日曜・祝日は10:00~18:00)



和歌山の花きに関するお問い合わせは…

和歌山県農林水産部果樹園芸課  
 〒640-8585 和歌山市小松原通1-1  
 TEL. 073 (441) 2900 FAX. 073 (441) 2909  
<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/index.html>



# 3つの太陽に恵まれた 全国有数のかすみそう産地

春の野山に儂くたなびく白い春霞を思わせることから名付けられたという「かすみそう」。英語では赤ちゃんの吐息を指す「Baby-breath」と表現することからも、淡くやさしいイメージが世界共通なのだろう。

そんな「かすみそう」には大きく分けて2つの種類がある。1つはガーデニングなどで使われる一年草の「かすみそう」。

そしてもう1つが切り花用として目に触れる多年草の「宿根かすみそう」で、無数の小さくふわふわとした花がドーム状に咲く。一般的にかすみそうというと、この宿根かすみそうを指すことが多く、花束を作る際の添え花の定番でもある。和歌山県

は、この宿根かすみそうの全国有数の産地である。

和歌山県のかすみそう栽培の歴史は昭和49年に遡る。紀伊半島の南斜面に沿い、県のほぼ中央に位置する印南町は、黒潮暖流の恩恵を最大限に生かした純農村地帯。ここに印南花き園芸組合の古田襄治氏によって導入されたのを機に栽培が始まった。当初は生理生態が不明であったことから試験研究のデータもない状態。そこからさまざまな研究を重ね、株冷蔵処理や電照処理といった開花調整や二度切り栽培法などを確立した。この地域は遮へい物がなく「直射日光」「海からの照り返し」「山からの照り返し」と3つの太

陽に恵まれたエリア。この温暖な環境が花き栽培に適していたことから、隣接する御坊市と共に徐々に花き産地として発展。宿根かすみそうやスイートピー、スターチスの一大産地となった。



印南町。同町のシンボルである「かえる橋」の袂には、かすみそうを始めとした様々な農作物の栽培地が広がっている。





# 美しい花を咲かせるため 1つ1つの工程に工夫

とが重要だ。

収穫期を迎える  
と、花は茎の下方の  
蕾から開き始める。

以前はこれが1本に

ひとくちに宿根かすみそうと  
言っても、さまざまな品種があ  
る。そのうちで現在最も広く流  
通しているのが「アルタイル」と  
「パールスター」。和歌山で作ら  
れている宿根かすみそうもこの  
2種が生産量の7〜8割を占め  
る。基本的には施設栽培が中心  
で、10月から6月にかけて、2度  
の採花を行っている。故郷の印  
南町にUターンして夫婦で宿根  
かすみそうを栽培している中川  
敏之さんもハウスで栽培

を行なっている一人だ。

8月下旬から10月下旬  
にかけて定植。発芽した後  
は整枝を行い、1株あたり  
3〜4本の主枝を仕立て  
るのがバランスよく育て



るコツ。ハウスのビニールは最  
初から張るのではなく、10月頃  
までは露地で育て、台風などの  
心配がなくなった頃を見計らっ  
てビニールを張り、低温期の温  
度確保と雨除けを行う。またか  
すみそう栽培は何より日照が重  
要。日照の短くなる10月末から  
3月頃には電照を取り入れるこ  
とで、葉が伸びず節が詰まる「ロ  
ゼット」を防ぎながら花芽の揃  
いを良くするよう導いていくこ

2輪咲けば収穫とされた  
が、そうすると出荷の頃に  
は3輪目が開き、最初に咲  
いた花が枯れ始めることか  
ら、最近では1.5輪で収穫する  
ように。それだけ繊細な花  
だけに、採花のスピードが  
重視される。品質を保つた  
め専用の前処理液を事前に  
準備し、採花後は速やかに  
水上げし素早く選別。さらに涼  
しい場所で保管し、出荷直前ま  
で前処理液に浸けておくのが鉄  
則だ。開花調整施設へ搬送後も  
花は開花調整液に浸けられ、専  
用の開花調整室で出荷を待つこ  
ととなる。



「かすみそうは無難な分、用途も幅広い。生花でもドライでも、いろんな形で楽しんでもらえたら」と中川さん。

み、整枝などと同時に病害虫の  
対策も徹底する。こうして6月  
頃に収穫を終えたら、次期に向  
けて連作障害対策の土壌消毒や  
施肥、畝立て、マルチ張りなどの  
整地が行われる。収穫期以外も  
決して気は抜けないが、手をか  
けた分、可憐な花が応えてくれ  
る。

# 長く楽しんでもらえるように 日持ちを考えた開花調整



和歌山の宿根かすみ

みそうはポリウム  
があつて花持ちが良  
いのが特徴と言われ  
ている。この花持ちを  
コントロールしてい  
るのが、全国にも2ヶ  
所しかない「かすみそ  
う開花調整施設」だ。

花の持ちは開花し  
てからの管理によつ  
て全く違ってくる  
という。そのため採花し  
て出荷するまでの処  
理を徹底管理し、温  
度、照度、湿度を調整  
して開花を促進した  
り、低温による鮮度保  
持剤の吸収不足を調

整している。

また急激な温度変  
化や直接風にあたる  
ことは花のストレス

になる。そのため保管は10℃以  
下の低温で貯蔵し、外気温との  
温度変化に慣らすため、出荷前  
には換気扇でゆっくりと温度を  
調整するよう細心の注意をは  
らい、24時間体制の調光や自然  
対流式の超微風、超音波加湿器  
やエチレン除去装置など、開花  
調整室の様々な機能に加え、鮮  
度保持検査で随時検品すること  
で、高い品質を保持している。

目標は、消費者目線で見て、  
1週間の観賞価値を持たせるこ  
と。以前はそこまで日持ちさせ  
ることは難しかったが、この施



設を開設したことで、1週間か  
ら長いもので1ヶ月程度まで持  
つ、高品質な花を送り出せるよ  
うになり、より長く消費者の目  
を楽しませることができるよう  
になった。





# 主役も張れる鮮烈な色彩 かすみそうの新たな可能性



種類があっても基本的にかすみそうは白が基本。他の花を華やかにするにはちょうど良いものの、単体では個性が少ない。そこで「主役になれるかすみそうを」と誕生したのがカラフルな「染めがすみ」だ。

福島の宿根かすみそう産地、昭和村と協力して開発した染めがすみは、採花から前処理までのマニュアルを作り、専門の担当員がカラーリングを行っている。イエロー、オレンジ、レッド、メロン、ピンク、ブルー、ラベンダー、ミルカ(濃い紫)の全8色があり、いずれかの単色だけでなく全色入った「ミックス」も花屋で注文が可能。8色が勢揃いすると「これがかすみそう!？」と

驚くほどポップな花束になる。気になるのはその作り方。この鮮やかな色は、白いかすみそうを採花した後に色粉を加えた水で給水処理を施し、一定期間置いて開花させることでできあがる。また出荷後に開く蕾は色水の影響を受けないため、元の白い花を咲かせる。この2色の状態もまた愛らしい。ペーシックな白とともに状況に応じて使い分けられるカラーバリエーションが増え、かすみそうの新たな可能性が広がりを見せている。



# 定番の白は 生花・ドライで 脇役としての 使いやすさを追求

宿根かすみそうはブライダルや葬儀など各種イベントでの花束、アレンジフラワーなど、何にでも合

わせやすい、言い換えれば「無垢」な花だ。花束を作ったり花瓶に生けたりする場合に周りにあしらえば、誰が扱っても華やかに整えることができる使い勝手の良さは他に類を見ない。

最近は一スーパーやホームセンターで販売される完成されたパック詰めの花の人氣が高まりつつある。その流れの中で決まった規格の花を組み合わせる



場合に宿根かすみそうは使いやすく手軽に花を楽しめると、市場の需要が高まっている。本来は1本の芯となる茎から枝分かれますが、既に枝の状態出荷したものが、カットの手間が省けると好まれるようになっていくという。

またドライフラワー素材としての人氣も依然根強い。もともとかすみそうは寿命が短い部類

の花だが、ドライフラワーにすることで長く楽しめるようになり、さらにスワッグやドライアレンジが普及することで、さまざまな使い方が生み出されている。色あざやかで見栄えのする染めがすみの主役として存在感を出す一方で、定番の白い宿根かすみそうは別の面から「脇役としての使いやすさ」を追求し続けている。

7月7日は「七夕」であると同時に「かすみそうの日」でもあり、無数の小花を満点の星空に例えるロマンティックな記念日になっている。また、「いい夫婦の日」である11月22日もかすみそうの花言葉である「感謝」にちなんで、かすみそうを贈る日とされている。派手さはなくとも、さり気なく寄り添う心を伝えるかすみそうは、贈り物界の名バイプレーヤーといえよう。